

令和四年度

横浜市退職小学校長会

俳句部会

4

俳壇

# 花 水 木

俳句往来④

百号

俳句部創設 25周年記念  
句集誌創刊 第百号記念

(令和五年三月)

花水木 創刊百号 目次

◇はじめに	.....	部長 福田三郎	.....	1
◇あいさつ	.....	会長 大久保重則	.....	1
◇あいさつ	.....	元部長 前橋竹之	.....	2
◇俳句部のあゆみ	.....	.....	.....	3

会員特別作品 二十句と小文

初恋の	.....	六本木 彌太郎	.....	6
文字摺草	.....	前橋 竹之	.....	10
秋澄むや	.....	高橋 定雄	.....	14
花蓮華	.....	川口 美明	.....	18
里山の	.....	大石 金雄	.....	22
秋深し	.....	相澤 淳子	.....	26
水際の	.....	山本 尚之	.....	30
清水の	.....	高橋 郁枝	.....	34
独り酌む	.....	月田 和子	.....	38
春一番	.....	堀井 佳一	.....	42
桃太郎	.....	濱野 郁子	.....	46
孫五歳	.....	吉野 誠	.....	50

茶の花の	.....	荒井 篤	.....	54
能舞台	.....	福田 三郎	.....	58
青山を	.....	鷺山 龍太郎	.....	62
燃えよ赤	.....	野村 啓子	.....	66
夜は長し	.....	小坂 映夫	.....	70
ガリ切りし	.....	中澤 信子	.....	74
椎の実も	.....	桑原 正子	.....	78
一握りの	.....	宮澤 一雄	.....	82
枯葉降る	.....	齋藤 隆士	.....	86

旧部員雑詠

五十嵐 貢	.....	白石 孝徳	.....	山口 昭和	.....	山本 要子
首藤 安子	.....	峰岸 三郎	.....	渡辺 英城	.....	輿石 スミ
長谷川はつ子	.....	鈴木 ヤエ子	.....	乙須 利昭	.....	栃木 やよひ
石川 琢之	.....	桑原 昇	.....	高橋 和子	.....	高橋 安司
篠木 昭弘	.....	繁里 剛	.....			

◇思い出すあの句 あの人 あの句会

◇巻頭句欄を作って

◇あとがき 編集談話室

.....	94
.....	95
.....	96

## はじめに

### 俳句活動の温故知新

部長 福田 三郎

横浜市退職小学校長会に俳句部会が発足したのは平成八年。この年に、六本木彌太郎先生の呼びかけに応じた十名の俳句作品が編集され、句集の第一号は発行されました。以来25年間、句集誌「花水木」は休刊することなく継がれて、令和四年度に第百号を迎えることになりました。

この節目となる百号を、記念句集誌として発刊すべく、特別編集委員会を立ち上げました。記念句集は過去に二度発刊されています。第I集は、退職小学校長会結成四十周年の祝賀事業で平成17年に。第II集は、平成27年に結成五十周年の記念自主事業として発刊されました。この度の記念句集誌は、俳壇花水木創設25周年と句集第百号を祝っての発行です。

「花水木の25年間の歩みを回顧し、令和の俳句活動を継続する」を合言葉に、知恵を出し合い、編集作業を進めてきました。彌太郎先生の急逝されたことや俳句部創設期を体験した会員も少ない現状にあつて、「花水木」の句集創刊号等の貴重な資料が手許に届いた事は救いでした。

和綴製本された「俳句往来」は、写真に撮り記念句集の資料頁に載せました。ぜひ実物をご覧いただきたいと

思っています。

現在俳句会員の数は20名前後で推移しています。コロナ禍での句会運営には工夫が要りますが、席会と通信句会と組み合わせ、年間で4回句集花水木の発行は続けていくべく努めています。

この記念句集で、過去を懐かしみ、現在を直視し、時節に応じた俳句活動が展開できるようご愛読されることを期待し、お願い申し上げます。

## あいさつ

### 花水木百号に寄せて

会長 大久保 重則

花水木第百号発刊おめでとうございます。俳句部会発足来一度も休刊することなく、二十五年間も続けられた部員の皆様のご功績に退職校長会を代表して感謝申し上げます。

私も一度だけ俳句の会に参加させていただきました。部員の皆様の一句一句が私にとっては、目を見張る句ばかりでした。

私も一句作りましたが、なかなか五七五にまとめられないで頭をひねった覚えがあります。家に帰り、その話をしたら、女房の友達が、「俳句はそんなにむずかしくないのよ」と簡単に言われました。その方は、普段の生活の中で、「目にしたものの、耳にしたものをメモにして



おいて、それを句にすればいい」「要は気楽にのん気な気持ちでいる方がふつと言葉が浮かぶよ」と言われます。その方は俳句作りが好きで句を作り始めてから、ものを丁寧に見たり、見たものの裏側を考えてみる様になったり、また、知り合いが増え、たくさんの方の友達が出来たと話してくれました。

振り返れば、小中高の国語では必ず俳句があったこと、「俳句には季語がつく」と言われたことを思い出しました。

今回、花水木の俳句の会に参加して「五七五」の楽しさをわずかながらも教えられました。

これからも花水木会がますます発展されることを期待しております。

## 俳句と歩む

元部長 前橋 竹之

俳壇「花水木」百号記念句集を発行することができましたことを、創設から参加している会員のひとりとして、心より嬉しく思います。退職小学校長会に俳句部会が結成されたのは、平成八年の夏でした。ことしで二十六年目になります。その間、退職小学校長会の結成五十周年記念事業として、句集を発行しましたから今回は第三句集です。

これも俳句部会創設当初から、毎回の選句評を俳句往来冊子にまとめられ、編集・印刷まで引き受けて下さっ

た六本木彌太郎先生がいらっしやったからだと思えます。この百号記念句集の発行を目前にして、先生が旅立たれました。先生は最後の最後まで会員一人ひとりの句を、作者の意図に寄り添って鑑賞指導して下さい、俳句と歩む人生の豊かさ喜びを教えてくださいました。心より感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

冬日向虚子の旧居の縁にをり 彌太郎

丁度一年前の「花水木」95号に掲載された先生の句です。虚子の旧居は先生にとって、特別な場所だったのではないでしょうか。先生は鎌倉に住まわっていた青年教師の頃、花鳥諷詠の客観写生を説いた虚子門下に縁を得て、俳句の道を歩いてきたと聞いております。揚句は、寒気の中の輝かしい冬の太陽を浴びながら、旧居の縁側でしみじみと懐古している姿が目には浮かびます。「俳句は季題への飽くなき追求から始まり、虚子先生の言う客観写生の奥義を究めること」。常に先生のおっしゃっていた言葉が甦ってきます。

最後になりましたが、現部長福田三郎先生ならびに委員の先生方の努力によって、本俳句部会が運営されていることに深く感謝申し上げます。俳句は座の文芸です。これからも和を大事にしながらか、俳句と歩む人生の豊かさや楽しさを皆様と共に享受していきたいと思えます。

# 俳句部会 25年のあゆみ

——資料で回顧する——

俳壇発足に向けて下準備

発起人 六本木彌太郎氏

平成8年（一九九六）

退職校長会俳句部会が承認される

俳壇花水木（仮称）

俳句往来 第一号 発行 資料①

俳壇花水木 俳句往来 第二号

ここで句会名が「花水木」と決定 資料②



資料① 俳句往来 第一号 発行  
初期の俳誌は1名1冊にしたり、「俳句往来」として和綴じにしたり、いろいろな形を工夫していた。



資料② 「俳句往来」一号に載せられた、左記のエピソードと句をもとに、俳壇名が決められた。

## 花水木 六本木彌太郎

横浜駅東口七番ホームより一〇三番の「本牧車庫行き」のバスに乗る。八聖殿への磴を一気に上がる。途中まで息切れしない。今日も快調チェック。緑陰に、静寂（しじま）を楽しむ人影ひとつ。昔の沖合を懐かしむ如く…。

事務所を改装中。別室で歓談。

私の名も参観者名簿へ書き込まれる。

別れ際に俳句談義。花美し、小鳥好し、蝶佳しかと。

再就職の勤務先として、最高の場所という感あり。再訪問を約して、萬緑の坂を降りる。

道教ふ花の水木を目印に

平成12年6月

東小学校C日で初席会開催される  
以降 紙上発表を6月と2月

席会を9月と12月に定例  
句会として定着 資料③

平成17年(二〇〇五)

記念句集1発行(退職校長会結成40周年)

資料④

俳壇花水木 俳句往来 第28号 発行

このころから句集表紙がハナミズキ模様

退職校長会の会報誌に俳壇コーナーが設定

資料⑥

平成27年(二〇一五)

記念句集II 発行(退職校長会結成50周年)

資料⑤

平成30年(二〇一八)

草創期からの部員の変動による俳句部

新体制の運営となる

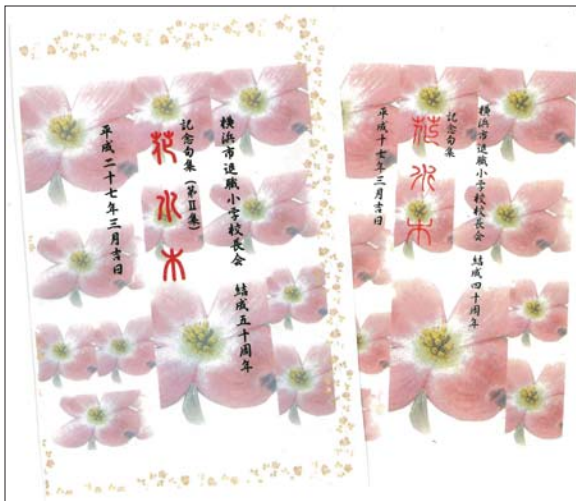
六本木彌太郎氏顧問に ※資料

席会場は東小から桜木町ぴおシティーへ

俳壇花水木81号より編集・印刷は部員で担当

6月発行

資料⑦・⑧



資料④⑤ 記念句集 I・II

### 東小C日での句会

定刻になり幹事句座準備

- 1 彌太郎さんは短冊(投句用紙)の準備。
  - 2 4色の短冊に投句、提出。
  - 3 清記担当者が清記用紙に書き写す。
  - 4 清記用紙を順次廻して各自選句。
  - 5 披講開始、自句が読まれたら名乗る。
  - 6 講評・鑑賞・指導は六本木先生。
- 句を貶すのではなく、褒めることに眼目  
正午を目安に句会終了  
その後鮎屋に行き、会食と俳句談義

### 資料⑥ 会報46号(平成22年8月発行)

俳壇

花水木個性の伸びる至本道 栃木 やよひ  
山峡も平野も植田影映し 六本木彌太郎  
連風の糸の緑り出す由比が浜 宮澤 一雄  
五月雨遠ざれしこく手につかず 高橋 和子  
公園や園児の列は夏帽子 奥石 スミ  
著茂の花弁財天の肌清し 濱野 郁子  
夏の朝来風のモノロー調渡り 乙須利 昭  
新緑や久遠を祈る飛鳥佛 桑原 正子  
万緑や合掌屋根著く結ごころ 繁里 剛  
蒼蒼に咽や蒼蒼にさ迷ひ蒼蒼の湯に 川口 美明  
畦に清ゆ畦に生れたら代田波 福田 三郎  
大徳を祈りて船出初夏の朝 大石 金雄  
柿の花さかんにこぼる築十年 相澤 淳子  
朝の戸を録りし空よりほととぎす 中澤 信子  
余生なお希望をつなぐ夏の蝶 前橋 竹之  
両雲を掃きて輝く若楓 五十嵐 貢  
炬板へ電動カンナ昭和の日 藤木 昭弘  
水汲みの道に碑のあり夏の雲 渡辺 英城  
荒井 篤

平成二十二年六月



資料③

令和2年（二〇二〇）

俳壇花水木89号より ワコー印刷利用  
六本木先生個人編集の一人秀句鑑賞を  
別冊で用意してください 資料⑨  
コロナ禍のため、通信句会に変更

令和5年（令和4年度）

俳壇花水木 第百号発行

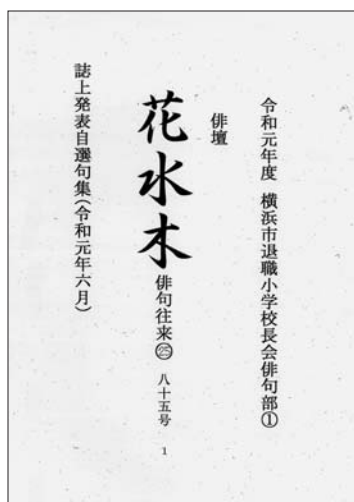


資料⑨

六本木先生個人編集の一人秀句鑑賞を別冊で用意

資料⑦

花水木八十一号より八十八号まで  
部員担当で発行



資料⑧

花水木八十二号は、新しい試みで編集してみました。席会に出席された作者直筆作品（短冊）を四グループに分けて貼り付け、出句一覧表として印刷して選句者に配布しました。  
※清記、選句、披講、話し合いの時間配分はまずまずでしたが、披講後の話し合いの時間はもっと生み出したいと思います。  
※欠席者の選句は、無理かと思いましたが、郵送したところ、即座に選句結果が編集者に届いたのでこの句集に間に合いました。

（花水木 八十二号より）



資料⑩ 「花水木」99号より  
句会風景 （2022年6月）

夏炉燃ゆ

初恋の人の点前や夏炉燃ゆ

六本木 彌太郎

師範学校本科の時、駅の階段で女子師範の予科に通う生徒とよくすれ違った。声をかけず終いで卒業した。

平成十三年。小二の孫がゆとりの時間で茶道クラブに入部した。茶道の先生があの人。びっくり仰天の縁。

十代ですれ違った人に、今茶道を学んでいる。不可思議。

春を待つ後見役も佳しとされ

(花水木 記念句集Ⅱより)



# 顧問 故 六本木彌太郎先生の足跡

## あの頃

六本木 彌太郎

野蒜掘る董もいつしよ着いてくる

野蒜摘み下校の子等の屯して

野蒜摘む野にいつぱいの雲垂らせ

野蒜生ふ少年歌を唱ひつつ

野蒜野に出でて大声発しけり

雪を削ぐ山風渡る野蒜摘み

平家池より温るむ水なりき

転居する繕ふ垣もなき庵に

きりきりと麻緒匂はせ垣繕ふ

## 俳句あれこれ

私（六本木彌太郎）は昭和二十六年四月一日、鎌倉市御成小学校の「一年二組」学級担任になりました。

担任児童の中に虚子先生のお孫さんがいました。

現「春潮主宰」松田美子先生。虚子先生の六女「上野章子先生」の長女。

上野泰夫妻のご指導を受け「爽々会」にも入れて頂きました。

清崎敏郎・高田風人子さんも在籍された会です。

虚子選句

時々菓子ふるまはれ冬籠

彌太郎

削りては乾きし道に雪広げ  
同

五女 晴子先生の「留守居役」三年お引き受けした関係で、第一回から小諸の「虚子・こもろ全国俳句大会」に参加しています。

そこら中煙らせ垣を繕へり  
 ねんごろに繕ひはじむ五加木垣  
 佐介谷戸垣繕ふて引つ越せり  
 引つ越し時またまた垣を繕ひぬ  
 他家の灯の垣繕へる二日ほど  
 僧房や肘をかたみに垣繕ふ  
 古竹をのけて青竹垣繕ふ  
 垣と言ふ景を繕ひをりにけり  
 垣破れ繕はず人笑ひ住み  
 垣繕いおりぬ巨きな人なりし  
 垣繕うことも根気の続くうち

《同窓会》

私は三校で学級担任をしている。

現在でも続いている教え子の同窓会は三つ。

その一つが石川一郎君の組。

横浜市立大綱小学校の四年生。

数学教育推進校。

問題解決学習の型は今でも生きている。

もう六十にはなったのかしら。

右の写真は玄関に飾ってある。



くがいあきひさです  
 ぼくの「ひいじいちゃん」  
 六本木彌太郎です  
 ハケ月這い這い  
 できます



マサちゃん  
 お妙さん  
 彌太郎  
 栄子ちゃん

句のよさの発見を 顧問 六本木 彌太郎先生の選句講評から

薬飲ますために飯たく暑さかな

※九・四・五 山頭火流 介護愛手をかける

はい御飯はいお薬よ葡萄はい

荒梅雨の茶屋の雨垂れ屏風なす

※起承転結型写生句 新感覚派的

花しおれ灼けつつままの道祖神

※芭蕉の「侘び・さび」流 禅の心漂う

夕やけの赤さ増したる唐辛子

※「の」説明的 「や」で夕焼けも楽しめる

池塘咲く竜胆の如人逝けり

※比喩の素晴らしい追悼句 上五美しい

したたかに生きよ語れよ敗戦忌

※玉音の掠れ哀しげ敗戦忌

十八が九十三歳終戦日

庭に水ひとときの間に忍びの蚊

※「にまわし句」庭に忍びの蚊

「庭に一時」「・・間に忍びの蚊」

新航路夏雲横切り滑り降りる

※俳句は「一汁一野菜 新航路・滑り降りる（安心感）

表現「事実と情感」「事実のみ」「情感のみ」

糸垂らす背中が語る秋夕陽

※「まわし句」は原因結果型俳句 長時間の釣りの一刻

昼下がりに日傘の幼女影重し

※「おおまわし句」昼下がりに影重し

桃太郎飛び出しさうな桃届く

※「桃の新鮮さ」と「おとぎ話」の合体比喩句

教室の密と距離置く夏休み

※禅の三みつ 僧修行 身みつ 手に印を結ぶ

口みつ 真言を唱える 意みつ 心に本尊を観念する

夏痩せの腕も卒寿や皺多し

※しみじみとした人生観 ふと振り返る九十年

半月や野良も私も暑き夜

※俳句はコンビネーション 半月・暑き夜 絶妙

花水木 俳句往来③⑩号より

文字摺草まこと素直にねぢれけり

前橋 竹之

「文字摺草」の別称はネジバナ。小さなピンクの花が螺旋状に咲くのが可憐である。「ねじれ」はこのような小さな植物にとって、苦しみでもあるように思われるが、ねじれて育つのは利点を求めて進化し、辿りついた長い歴史の姿である。庭の雑草に紛れて咲くこの花のいとおしさを「まこと素直に」と詠んだ。

# オバマの鶴

前橋 竹之

初髪の下駄音かろき段葛

捨て舟に砂吹き溜まる多喜二の忌

三寒を発ちて四温の港着く

一声は鳶の笛なり春祭

春暁を羽化するごとく目覚めたり

パンに塗るバターとろりと夏に入る

如才なきAI嬢や声涼し

「ゲルニカ」の民の絶叫はたた神

花火果て大群集の闇解る

## 写生俳句と心象俳句

① 遠山に日の当りたる枯野かな

虚子

前景に渺茫たる枯野、そして遠景には日の当る山。その他には何も述べていないが、言葉に表せない名画の味わいがする。花鳥諷詠の客観写生を説いた虚子の写生俳句である。

② 荒海や佐渡によくたふ天の河

芭蕉

おくのほそ道で詠んだこの句は、旅が終わった後に心の中に浮かんで、再構築されて生まれた心象俳句である。実景描写だけでなく、歴史と運命に涙する詩人の魂が生んだ。



蝸螂の孤高の斧を風の研ぐ

蓑虫もじしゆくと鳴くよ疫病の世

広島にオバマの鶴や冬ぬくし

妻と世を隔てて御慶申しけり

寒九の水飲めば百薬得しこち

渴筆のごとき老樹や梅ひらく

おほらかに物忘れして花の昼

春風に掴まって漕ぐ一輪車

清明や振れば音するハイボール

独り居にも暮らしのリズム更衣

黙禱の時刻を確と生身魂

③ 自句自解

・春風に掴まって漕ぐ一輪車

子供たちが両手を広げてバランスを取りながら一輪車に乗って遊んでいる。その姿を「春風に掴まって」と写生した。

・「ゲルニカ」の民の絶叫はたた神

かつて、プラド美術館で衝撃を受けたピカソの絵が、終戦日近くにふと喚起されて詠んだ心象俳句である。過去の体験を「現在、只今の瞬間を切り取る」境地で詠んだ。

渴筆のごとき、老樹や梅ひらろ　竹之

評　典型的な「ごとく」俳句。俳句の一分野

磨かれた「写生眼」があつてこその一句です。

「○○のごとく」は上級者が使う用法です。

日本画・墨絵の梅の老木が目に見え、孤独な臥竜梅かも

横浜では「三溪園の臥竜梅」が素敵です。

※添え発句　紋章の如き梅花や庵の窓

実物の如き盛り付け子持鯊

渴筆の如くに老ひぬ施設入り

春一番鏡の如き潦

母知らぬ食器洗い機音涼し　郁子

戦後の一九五〇年代にテレビ・洗濯機・電気冷蔵庫などの家庭用の電気製品が登場したが、高価であったので三種の神器に喩えられて重宝された。今ではどこの家庭でも電気製品なしでは生活出来ない日常である。

食器洗い機が静かに音を立てて作動している台所で、ふと竈で煮炊きをしていた母親を思い浮かべている作者。なにげない生活を「音涼し」と結んだことで、情趣豊かな句となった。

竹之より

秋澄むや華嚴の滝の水しぶき

高橋 定雄

六年生の修学旅行で、春夏秋の三回目の引率時、華嚴の滝が絵画のようきれいでした。滝の音と水しぶきの白がマッチしていました。空気が澄んでいて肌にひんやりと感じたことも思い出されます。

# 畑と走路と学校と

高橋 定雄

お土産のツルムラサキや夏休み

秋暑し顔いっぱいの野菜かな

ササゲ採りむしろ広げて棒で打つ

一本の苗からスイカ五个実り

網掛けた柿の実通る秋の風

茗荷花高尾山にも咲きにけり

朴木の下草ひそむ夏来たり

高尾山樹木調べの夏休み

草刈機早朝起動遠慮気味

## 自句自解

◇スイカを作り実らせるのは難しい。初めて五个も実ったので格別なうれしさ。

農家20年目

◇森林インストラクターの資格受験のため、植物探し実習に行った。茗荷は種類ちがいが山にあったのが印象深い。

◇草刈機のことを全音漢字で表しました。

草刈りや背丈と同じ高さかな  
倒れこみタスキ繫いで汗の滝  
砂と岩蹴散らしタスキ繫ぐ夏  
タスキ受け太郎坊から夏登山  
頂上にタスキ届けて夏の富士  
秋風に乗って走るや友も古稀  
勤務終え初任教師の帰省かな  
千個咲く朝顔の花校庭に  
風鈴や修学旅行の風になり  
秋風や瓢箪急に増えにけり  
十輪のマリーゴールド草木染

◇富士登山駅伝のサポーターとして参加した。応援もおもしろい。

◇間引きあさがおを集めて、花のトンネルを作った。千個近くも咲いたのが印象的でした。

### 俳句のたのしみ方

◇行動、活動したあとに良かったことを句にするので、いつも楽しんでいきます。

◇短かくまとめられるので好きです。



## 竹林の池の小径の蓬摘

定雄

評 「の繋ぎ句のお手本」「一つ句型」なので覚えておきたい。

竹林が蓬摘みになっていくところが面白い。質のよい蓬から美味しい蓬団子が出来ます。その蓬をありかを知っているのが作者。喜びが溢れている一句です。

※添え発句 おくればせ畦の蓬を摘むことに

日照雨濡れてしまぬ蓬籠

けふ蓬摘まずあるく田圃道

こんもりと畦に叢あり蓬摘

膝ついて蓬摘みる蓬中

## 四番まで歌もうれしいひな祭

金雄

教師なりたての頃、三月三日は、女性の先生方に感謝の心を表す日と言われていた。一番若手の私は、甘酒を作る材料・ひなあられ・そしてまんじゅうを買いに行った。

最後に「ひな祭り」の歌詩を、印刷し、テープも整え、四番まで歌った経験があります。30分ぐらいだが、甘酒とお菓子、そして歌、お礼と楽しい会でした。30年以上続いていた。

定雄より

花蓮華開き御仏おはすらん

川口 美明

暑い夏の朝、いつも通る散歩道の寺院の池に、朝日を受けて蓮の花が咲いていました。大きく、ゆるやかな葉の上に、気高く真白に咲いている、その姿は見る人を、すがすがしい気分になさせてくれます。久遠の昔より渡来してきた仏様が蓮弁の上におられるような気がしました。八重の蓮弁に座している御仏は、衆生の思い・願い・苦しみを受けとめ、「無量」の力と光を放ってくださいさることを思います。

# 顔和む

川口 美明

花びらの淡き光に顔和む

風温し心も浮かれ散歩道

またや見む思い馳せたる吉野花

コロ十明け朧月夜に人の声

柔らかに緑弾けて子は伸びる

コロ十禍に鍾馗に祈る夏袂え

夏の海波照り騒ぎ子ら泳ぐ

蛍飛び「枕草子」いとをかし

花蓮華開き御仏おはすらん

## 自句自解

花びらの淡き光に顔和む

うらうらとした温かさの中で、  
万物が躍動しはじめ、桜の花も一  
輪一輪と咲いていきます。

寒く、長い冬が終わり、「三寒四  
温」の言葉のように、一歩ずつ少  
しずつ、春の音が聞こえてきます。

柔らかな春の日の中、人々の心  
も体も浮き浮きとした気持ちになっ  
てきます。そのような情景からこ  
の句を作りました。春はいろいろ  
な時間・場面で期待と喜びが交錯  
しながら過ぎていくと思います。

「話す」こと「伝える」こと

最近のニュースや報道番組など  
で、話す言葉が早口過ぎて、何を  
言っているのか分からない・話の  
内容が聞き取れないことがあります。  
話す話している内容を頭に留め、

長雨に辟易として「ごんぎつね」

空蟬に生まれし命いとおしき

天高く両手を上げて生きる吾

亥子餅無事を願いて炬燵出す

侘びし朝道は紅葉の錦なり

小春日に猫もゆくりと大あくび

暮れる日に夕べは秋とかぎるなり

青天に山の嶺々くつきりと

毛布取り日なたこいしき今日の朝

あといく日追い立てせまる師走風

陽温くし氷柱の先に滴あり

考えること、心に受けとめ感ずることが、早やすぎて少しでも立ち止まって、理解できないのです。話し手は、視聴者ではなく、自分やそこにいる人だけが対象者ではないかと思ってしまう。話すだけで一番大切な対象者に「伝える」ということがないように思えます。時間と字数もあると思います。すがやはり、伝える理解するが大事です。

花水木で出逢った

印象深い8句

初孫のかざす手の先初日の出 正子

凜と咲く白き侘助背すじ伸ぶ スミ

鎌倉の桜一弁盃に乗り 剛

新緑の能楽堂の琵琶深し 和子

まだ来ぬかも鳴きをるか  
ホトトギス 三郎

螢火の声あるごとき乱舞かな 竹之

屋形船灯ともし始む秋の夕 淳子

冬田にて初焼く畑静かなり 佳一

新春や孫等の声に心湧く

美明

評 「二句一章句」とも「おおまわし句」ともとれる。

新春で「心湧く事象」に「孫の声」を選んだ。

心湧く「感性」が尊い。

新春で「心湧く事象」を拾ってみよう。

※添え発句 新春や一刀彫り心湧く

新春や人語ゆき交ふ心湧く

新春や孫訪れに心湧く

新春や厨子開帳に心湧く

新春や孫にまぶしき晴れ着あり

新春の御慶はふるさと言葉にて

終うのを忘れられしや注連飾り

隆士

正月飾りは、新しい年への人々の期待や祈りがあります。三が日七草粥が過ぎると、日常的な忙しさに紛れて、終うことを逸することがあると思います。いろいろな願いをこめて飾ったことなのですが、寒風に吹きさらされて、いつまでも付いていると、だらしなく間が抜けたものになってしまいます。

日常の何げない生活の中に、作者は正月飾りに着目して表現された、すばらしい一句だと思えます。

美明より



里山の早苗かがやく棚田かな

大石 金雄

今年もNHK合同句集「くにたち」に応募しました。

今年は、昨年の倍以上の74名の参加者があったので、2分冊に分けて発行することでした。

私は92歳です。

頭の働きを少しでもよくするためと、ポジティブの姿勢を持続していくためにも、これからも、挑戦していきたいと思っています。

合同句集「くにたち」32集に収録されたわたしの「一生青春」の代表句となりました。

# 万歳「花水木」第百号

大石 金雄

万々歳「花水木」遂に第百号

百年経米国返礼花水木

花水木街路樹つづくかぐはしく

飛ばぬ子に羽ばたき激し親燕

ちむどんどんハイビスカスも薬を立て

故里くりにの野辺盆花とりし遠き日や

「友愛」のガーデンパーティ天高し

赤とんぼ先導うれしデイ送く迎る車ま

呼んでみる鎌倉山の星月夜

◇彌太郎氏へ

終戦忌忘れぬ民となりにけり

彌太郎

忘れるどころか、同じ体験者です。

戦地こそ行きませんでした  
が、学徒動員はあるわ、空襲  
で火の海をかいくぐり逃げた  
こともあるのです。

ウクライナの若者を思いま  
す。母国を護る為に戦って  
います。

私達と同じです。  
戦争は反対です。

金雄

日は高し相呼ぶちちろ遠く近く

コスモスは黄ポストは赤や投函す

名月を仰ぐは幾度月しろゆ

名月やあまねく照らすわが町を

フイリリリリ声分け聞くや草ひばり

熊ん蜂秋の大道大往生

杉田郎かざるははきぎ帚木紅葉かな

「柿右衛門」真つ先浮かぶ柿仰ぐ

旅出雲神有月の二重虹

はたはた鮎はたはたや男二人のしよつづる鍋

初冠ゆき雪の富士見はるかす母の里

里山の早苗かがやく棚田かな

金雄

私の一句の鑑賞

田植えが終わったばかりの棚田でしょう。棚田の田植えには平地とは違う苦労があるのでしょうが、今は、厳しい作業を勞うように太陽が静かに植田を照らしています。〈かがやく〉は、単に青天を表現するだけでなく、稲の生命や田植えに従事した人の労働を称える言葉でもあるでしょう。

一連の中には〈教へ子〉を詠んだ句もあるので、教職にあつた方でしょうか。「一生青春」というタイトルどおり、老いに負けない若々しきに満ちた一連を代表する一句と言えます。

「くにたち」編集者

館野 豊より

蠟梅の空青々と香り立つ

金雄

評 見事な客観写生句なので次のような場面が想像

像出来ます。

◎ケープルカーで訪れる程の山の「蠟梅園」今満開。

蠟梅の香りの中を観梅客が動く。青空の下に秩父盆地が広がる。

※添え発句 蠟梅の風吹き抜けて香り立つ

蠟梅の園人々に香り立つ

蠟梅の駅麓より香り立つ

蠟梅の人を恋ひて香り立つ

蠟梅は御堂の前や瑞泉寺

蠟梅の香が日だまりに歌碑を読む

蠟梅に鼻もってゆくどの人も

デジタル化の暮しに疎く春火鉢

竹之

私も全く同じです。

私は常々「カタカナ語」は、判らないから嫌いだと言っています。

「春火鉢」とてもこの句に合っています。冬は過ぎているのに、いまだにその俣使っている。

時代遅れと通じ合っていて、句としての味わいを、とても深いものになっています。

金雄より

秋深し枯山水と床もみじ

相澤 淳子

十一月下旬、群馬県桐生市にある禅寺の宝徳寺を参拝しました。

境内には百本以上のもみじが紅葉し、周囲の山々も赤や黄色に染まりまさに「紅葉浄土」の世界です。修業僧たちによって磨き上げられた床に、周囲のもみじが映るのです。

また、京都の竜安寺に勝るとも劣らない「枯山水」のお庭も拝見でき一つの寺で、二つ楽しむことができました。

# 四季の移ろい

相澤 淳子

古き友息災知らず賀状来る

形だけ節せちの真似事母偲ぶ

初詣老若男女が願い事

天焦がす願いの煙どんど焼き

短日や家路を急ぐ子らの声

梢にも冬芽いかほど膨らみて

ひな飾り吾が来し方を見守りて

春の夕世間話に終わりなし

ランドセルいとも小さく卒業す

## 俳句あれこれ

◇ 俳句との出会いは故六本木先生との出会いに重なります。

定年を迎える最後の卒業式に先生はお出で下さり、式の間児童の様子を俳句に詠み、その句をおみやげにお帰りになりました。その後お会いした時に、「花水木」へのお誘いを受け、今に至っています。

◇ 住居のある金沢区は海あり、山あり。四季の移ろいや日々の暮らしを俳句に詠んでいます。

孫二人前途洋々卒業す

貝よりも人の多さの汐干瀉

草屋より煙一筋梅雨空へ

紫陽花の日毎色づく雨もよい

梅雨半ばけさも傘持ち家を出る

くちなしの香に足止まるマスク越し

カラフルなヨット行き交う海の沖

秋日充つ浜べに子らの声弾む

秋高く富士黒々と橋向う

散り頻る桜紅葉をくぐるバス

そそくさと師走の街を駆け巡る





初詣祈るはただただげ封じ 淳子

評 私の読んでいるお経の本に、次のような一文があります。

「病を治すには三つの方法がある。

一に 良い医者に見てもらふこと

二に 良い薬に出会うこと

三に 悟りなり」

げけ防止一・二を実行して各自で努力しましょう。

※病院では、直ぐ「名前・生年月日・今日は何月何日等」

を聞きますよ。

自力で出来ることは自分でが基本です。

※添え発句 初詣大吉引けり有頂天

男坂女坂にて初詣

初詣鎌倉駅と約束す

初詣小さき宮には願ひとつ

初詣小町通りの賑へり

初詣弁天様の生玉子

評 道端の立葵と子の背比べ 淳子

※微笑ましい日常風景が詠まれている。

園児のが毎日通る歩道の植え込みの立葵。

癒やされる人生の一時。

小春日の校舎にすつく柏の木 一雄

小春日の中木造校舎のある運動場に、柏の木が背伸びしているような光景が目には浮かびます。

柏の葉は柏餅に使われることで有名です。又、

冬でも落葉せず枝に残ることから、縁起のよい木ともされています。

校庭に植えられているのは子ども達がすくすく成長して欲しいという願いから選ばれたのではと思います。作者の「すつく」という表現は、健やかな成長を願う思いが感じさせられます。

淳子より

# 水際の高層ビルや夏の雲

山本 尚之

この句を詠んだのは平成二十九年の春頃だと記憶している。

病院からの帰途駅のホームから眺めた多摩川の風景からである。

俳句部会に入会したのもその頃で投句した句が「花水木77号」に記載されたことがとても励みになったものです。季節に関わる季語について調べることが楽しみになっている昨今です。

# 俳句の歩み

山本尚之

教室に緊張顔の入学児

なごり雪路ばたに追われさびしげに

観覧車子らをくみあげ夏の空

尺取りのどこまで行くか枝の先

道くさをしてしている蟻に夏の雨

天に舞い水面に落ちる揚花火

鯉のぼり吸いこむ令和かがやけり

竹の葉に願かけ結ぶ星まつり

はしやぎ声団栗拾う小さき手

## 俳句とわたし

◇ いままで詠んだ俳句を二十句並べた。十七音という短い言葉の中に季語を入れ知らなかったことばを知ること俳句の楽しみを味わうことができた。

例えば上の句で季語の「黄落や…」で街路樹のイチョウの葉が黄ばんで落ち、道が絨毯を敷き詰められたような状態になっているのを見て楽しく詠んだものです。

山里の田畑にぽつり捨て案山子

亡き母の年こえ生きる墓まいり

黄落や音なき世界はらはらと

風に舞う落ち葉の舞台川面かな

手のしわをさすり伸ばして日向ぼこ

煤はらい見合わす顔に煤と笑み

手をまるめ吐く息白し冬の朝

冬日射す枯れ木の梢天を衝く

獅子舞は大きな口で福を呼ぶ

松過ぎて米寿の道を語り合う

雲や樹も輝き始む初日かな

### 数字1000に関わる

◇ 花水木1000号記念誌に関わり1000という数字との因縁に少なからず驚いている。

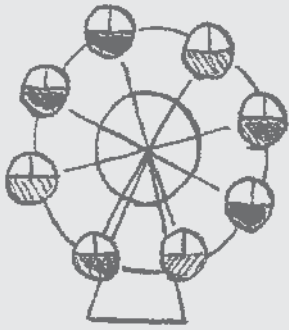
「花水木百号の冊子初句会」退職した学校での創立百周年の事業を地域の方々と協力で実施したことがある。それにしても、いままで花水木に携わってきた方々の俳句への歩みの蓄積が発表できたことは喜ばしいことである。

“おめでとう”

観覧車子等をくみ上げ夏の空 尚之

水車のように廻る観覧車。「夏の空」とあるから、子供達の夏休みの景である。子供達がつぎつぎに観覧車に乗り込んでゆく様子を、「子供等をくみ上げ」と俳諧味ある措辞で詠んだ。

横浜みなと未来の大観覧車が彷彿として目に浮かんでくる。夏空のエネルギーを感じる句である。



下校時の見守り終えて新茶かな 映夫

子ども達が三三五五家路につくのを見守った後、茶の間で一服している姿を想像します。

退職後も夏の暑い日、冬の寒い日子ども達の安全な下校を追い求める姿勢と事故防止からの指導の姿が見えるようです。

季語の「新茶かな」は五月の新芽を摘んだ茶と  
いうことで学校も新学期を迎え児童の登下校の安全が第一ですので的を射ていると思います。

尚之より

清水のやみ夜に浮かぶ紅葉かな

高橋 郁枝

久しぶりに京都へ、コロナ禍中の為感染対策をしたツアーで行った。紅葉は、何処もきれいだっただ。清水寺は、夜の特別拝観をやっていたため、日没を待って歩き始めた。順路に沿って行くといつの間にか本殿に出た。本殿舞台から見ると全山ライトアップされ、色鮮やかな紅葉に囲まれた社殿が浮び上がり、遠方には京の町並が広がっていた。本殿にもどり、世界の平和と人々の健康を祈念した。夜道案内の方々に守られて下山した。

# 紅葉がり

高橋 郁枝

寒中もタブの古木はどんとこい

梅園でパイプくゆらす翁顔

幼児背に旗ふる母や新学期

鉢の下トカゲ逃げ込む陽でりかな

ひぐらしが鳴く總持寺の床鏡

古代米赤が五重の塔に映え

校庭の田んぼで稲かり子ら笑顔

ゆずの葉に蝶舞い下りて香たつ

境内に大輪の菊中尊寺



長谷寺



◎写真（清水寺舞台等）

世界の平和を祈るのみ。

いる。

戦争の悲惨さはよく知って

◇ 満州から帰国して七十六年。

景や思いを読む醍醐味素敵だ。

に季語を入れてその時々的情

五・七・五 十七文字の中

思いきって花水木に入会。

◇ やっと自分の時間ができた。



枯葉舞ふ仏かがやく金色堂

紅葉てる津波の跡地瑞巖寺

奥久慈の四段滝に紅葉ふる

こけの庭紅葉色どる永観堂

長谷寺や観音菩薩ほほ紅葉

ハロウインの衣裳着た手に菓子袋

オデーサの小麦の船よ無事であれ

引揚船飛魚迎え博多港

帰国して夢みたみかんの味を知る

生きのびて祖国復興いちよう路

妹と行く女人高野に小雪舞ふ



清水寺



永観堂

港街白いばら咲くメリーさん

郁枝

かつて私も、めーりーさんを伊勢佐木町界限で見掛けたことが幾度もあります。白い厚化粧に口紅、白のドレスで悲しみをたたえた独特の表情が、彼女の背負ってきた戦中戦後の不条理を、無言で訴えているように感じます。

女優の一人芝居でも演じられ、語り継がれているヨコハマのメリーさん。掲句の白い薔薇との取り合わせが、彼女の物語に深い哀歓を添えます。

春風に新任教師仲間入り

定雄

新任教師として初出勤の日学校へ急いでいると「どんな学校だろう」「子ども達と仲よく出来るかな」など不安になって顔がほてってきた。すると春風がすーと通り過ぎて「大丈夫だよ」と言ってくれたように思えた。そこで深呼吸をして、まず先輩の先生方と仲よくしていこうと思ったら元気がでた。

作者は、春風になって不安いっぱいの新任教師に「みんなが待っているよ」「勇気を出してがんばりなさい」と励ましている。

郁枝より

独り酌む遺骨を膝に虎落笛

月田 和子

母は三十代の若さで、私を筆頭に五人の子を残して逝きました。子供心にも、着物の似合う美しい人でした。父は子ども達の幸せを第一に考え、再婚もせず、六十三歳で母の元へ旅立って逝きました。

生前、母の遺骨の埋葬を、理由をつけて先延ばししていた父の気持ちと思うと、切なくて、今も涙が止まりません。

移りゆく季節の中で

月田 和子

花の御所大宮人の宴何処

はらはらと妖し切なし夕桜

寂光院恩讐彼方沙羅の花

雑踏や母想わせる薰衣香

博多帯義母の汗染み隠し巻く

若く逝く母の無念よ喜寿の秋

ひたひたと朽ちし小舟に秋の汐

老いし背に付き添うごとく赤とんぼ

釣り上げし太刀魚キラリ闇を切る

◇京都御苑

・近衛邸跡の糸桜 枝だれ桜

◇滝口寺（京都嵯峨 祇王寺隣り）

・平家物語 横笛・高野の巻

・斉藤滝口時頼と横笛との悲恋の寺

・横笛歌石

横笛が指を切り、その血で歌を記した石

「山深み思い入りぬる柴の戸のまことの道に我を導け」

置き行燈ポツリ吐露する長き夜

紅葉燃ゆ思い血文字に滝口寺

金婚の旅路寿ぐ蔦紅葉

鞍馬路や越えて貴船の紅葉川

千年の都を包む夕紅葉

数珠むや繋ぎし君は今何処

黒塚や鬼女の涙か北しぐれ

綿入れや沁みたる温み捨てられず

冬の蝶涙一筋逝きし妹

誰を待つことじ徽軫しじ灯笼雪化粧

御所静寂望むは雪の大文字

◇鞍馬路（片道徒歩二時間程）

- ・鞍馬駅～鞍馬寺～義経が修業をした山道～太い木の根が地面を這う木の根道～奥の院～貴船
- ・道が整備されておらず危険箇所あり

◇黒塚（福島県二本松市）

- ・伝説「安達ヶ原の鬼女」の墓
- ・歌舞伎「遠翁十種の内」演目の一つ

◇徽軫灯笼（金沢兼六園のシンボル）

- ・霞ヶ池にある二本足の灯笼
- ・お琴の糸を支える琴柱（ことじ）に似ていることから命名された

※黒塚・兼六園は、退・校長会の読書会文学散歩でも訪れた

## 天秀尼恩愛哀し蓮の花

和子

※ 俳句にはある種の「教養」を持っていないと、正確に理解出来ない句があります。この句が当にそれです。

☆ 天秀尼（てんしゅうに）豊臣秀頼の娘で、千姫の養女。

鎌倉尼五山第二位・東慶寺の二〇世住持。

大阪夏の陣と豊臣系男子の末路を思えば「恩愛哀し」に辿り着けます。必然的に「蓮の花」と結ばれます。

☆ 内容の繋がった「俳句連」を虚子先生は「俳躰句」と呼んでいます。

第名「蓮の花」の四句は当に「起承転結」の俳躰名句

起 天秀尼恩愛哀し蓮の花

承 東慶寺岩肌飾る岩煙草

転 山笑ふ巢ごもりに耐え夢繋ぐ

結 天仰ぐ三蜜避けて夏の月

## またや見む命の限り桜花

美明

日本人にとって桜は特別な花です。かつて、翌年の桜を見る事なく、大空に散った特攻隊員を想うと、目頭が熱くなりますが、今の私にとって、桜は生きる喜びを与えてくれる貴重な存在です。毎年桜を見る度、来年も夫婦揃って花見が出来る事を、心底から祈ります。

素晴らしい句です。作者に心から共感し、絶大な賛辞を贈ります。

和子より

# 春一番エジプトからのメールあり

堀井 佳一

この句は、第22回全国俳句大会に応募した句です。

おかげ様で入選ということになりました。

知人のメールが届いた時、ちょうど春一番が吹きました。

春一番が送ってきてくれたように感じました。

エジプト、メールなどをどうやって使うかというのが、課題でした。



# 尖塔ひとり

堀井佳一

行く末の明るきものと手帳買ふ

八重椿静かに落ちて孤独なり

裏窓に金木犀の香ゆるやかに

秋の日や沈むがごとく恩師逝く

雲の峰より高みに富士の嶺

青空に向日葵の種膨らみて

湯の中に我が物顔の菖蒲かな

法師蟬朝からおのれ位置示す

半月の中空にあり秋はじめ

## 俳句に寄せて

◇ 花水木で俳句を作り始めて大分長い時がたちました。

毎回四苦八苦しながら作っています。

それでも自分の身の周りのことについて、時々「これはできるな」ということがすこしずつ増えてきたような気がします。

子どもらの声空に消へ九月なり

秋雨に尖塔ひとり立ちつくす

あぢさゐの鉢半値の札つきて

昼下がりに夏蝶飛んで木陰へと

青柿の葉陰にありていとけなく

メーデーの記憶の中の伊勢佐木町

風の道さがしさがして鯉幟

旋風に踊りてゐたる辛夷かな

ゆらゆらと柚子の香にのせる罪

雨上がり登校の子ら息白し

立春の豆四つ五つ狭き庭



観梅の老翁三人声高に

佳一

評 作法は③と同じ。俳句の作法基本型。

◎「観梅」と「声高に」に工夫あり。話の内容が聞きたくなる。

「観梅や」と切ると、老翁三人の行動が無数に詠む事が出来る。

※ 添え発句 観梅の茶請車座声高に

観梅の茶席遠近声高に

観梅や老翁三人寿司並べ

観梅や老翁三人孫自慢

花しおれ灼けつつままの道祖神

※ 俳句は室町時代以来「事象と感性」で、表現されて来ました。

飛梅や稚々しくも神の春 荒木田守武

閑かさや岩にしみいる蝉の声 松尾 芭蕉

春風や鬨志抱きて丘に立つ 高浜 虚子

これに対して正岡子規は「客観写生」を主張しました。

柿食へば鐘がなるなり法隆寺 正岡子規

事象の写生だけで、感性の探さを表現するのです。

客観写生に徹しているのがこの作者の作品です。

道祖神は里の守り神。「疫病退散」に今年は活躍中

蚕豆と五錢握りて走り出す

彌太郎

小学二年生の彌太郎少年が、売り声に誘われて急いで駆け出す情景が浮かびます。お多福豆は一粒一錢ですから、五錢では五粒です。

五錢のおこずかいをもらうのは時々しかなかったので、急いで表に飛び出す様子が目に浮かびます。

句は、蚕豆が季題となりますが、その背景には歳時記の文章があります。そこから視点がひろがっていくようですがよくわかります。

それにしても、当時の彌太郎さんの様子は、どのように想像するか。

佳一より

# 桃太郎飛び出しさうな桃届く

濱野 郁子

「お荷物ですよ」と。アツ桃かなと直ぐ出る。甥から電話が入っていた。気もそぞろに荷を開く。肩の張った見事な大きな粒の桃がびっしりと並んでいた。いい香りだ。思わず口から飛び出した一句。

「桃太郎飛び出しさうな桃届く。」

父から兄へそして甥夫婦へと。三世代の努力の賜物。福島大震災の放射線にも耐えた桃である。

# 望郷

濱野 郁子

望郷や三春ざくらを訪ひし日よ

弁天の肌つやめけり春隣

花菜漬青の苦味を楽しめり

若葉風友の案内の佃島

甦る亡母の自慢のうこぎ飯

風光る鼻歌ららと散歩道

新緑や歌碑建つ宿の吉野山

梅雨どきや農生ききつて姉は逝く

香水や婆もときめく日のありき

◇ 句座の始まり

場は、東小コミュニティ。

「花水木」句会の始まり。  
会場への一番乗りは彌太郎さん。「坂道の景色で一句作ったよ。」と声をかけられる。

句会で話足りなかった  
俳句談義の続きは、なじみの寿司屋で…。

◇ 「うこぎ飯」

うこぎの木は刺があり  
(防御を兼ねて) どの家でも垣根に植えていた。  
春先になると青々とし

た柔らかくて小さい新芽  
をご飯に入れて炊く。これがまことに美味である。  
故郷の伊達市は山形県米

天の川瀬戸の島々繋ぐ橋

日焼の子りりしたくまし逗子の海

終戦日われ十歳もはや米寿

老い三人ラッシュ厭はず葡萄狩

時の鐘見上ぐ小江戸や鯛雲

秋の展運慶菩薩へ立ちすくむ

敬老の日とやワインをポンと抜く

時雨忌やおくのほそ道吾が故郷

溪流の尖る水音紅葉散る

秘仏には縋るも逢へぬ冬の旅

戦ひはスポーツがよろし初日射す



沢と接している。かって米沢の地を治めていた上杉氏の奨励でどこの家も垣根に植えたようだ。

◇ 花水木の草創期から句会に参加しました。

手許にあった当時の句集等を、記念句集に役立てることができて、嬉しいです。

花菜漬け青の苦みを楽しめり 郁子

評

「花菜漬」京都に春を告げるブランド産品のことでしょうか。京都府の伏見桃山付近で栽培されてきた寒咲きナタネの蕾を収穫し漬けたものです。

心地よい歯ごたえとほのかな苦みが、京の春を感じさせる逸品として珍重されています。

浅漬けにした「菜の花漬け」としても親しまれています。和え物、おひたし、てんぷらなど幅広い用途で楽しめます。主な産地は長岡京市、井手町、亀岡市で、出回り時期は十二月中旬から四月中旬です。

※菜の花・アブラナ科の植物は一般的に栽培されているに  
でその花の「浅漬け」は普通に作られています。作者の  
「花菜漬け」はブランド品のようですね。  
食の楽しみ素敵ですね。

※添え発句 一碗の粥につけある花菜漬

京の旅土産に届く花菜漬

人の世に溢るるうま味花菜漬

温かい御飯を炊いて花菜漬

好日の昼餼おかず花菜漬

花菜漬独りじめなる昼餼かな

花菜漬我が家味を味わへと

富士に向かい尿する吾子や月見草 三郎

「花水木」俳句往来⑫。平成二十年九月号にある福田三郎さんの俳句である。

選句された方は六本木・五十嵐・高橋の皆様と私郁子であった。快技味のある句にハツとしたところが思い出される。三郎さんは時々こうした俳句を投句されておられた。

こんな楽しい句とんでもなかなか浮かばない。いつか私も挑戦したいものである。

郁子より



孫五歳ぐれが「フジ」かと林檎食む

吉野 誠

二年ぶりの「花水木」席会に参加、出句したデビュー作品です。三人の方が選句、六本木顧問の添削もあり、印象強い作品でした。孫を預かり幼稚園への登園前に、剥いた林檎を食べて名前を当てるクイズを企画。紅王、サン津軽、玉林など幾種類の中から林檎名を当てます。名前を当て腹も満たして意気揚揚と出かける孫。名前当てには孫本人の秘策もありました。

孫との交流は「楽しむ」ことだと思っています。

# 孫と旅と

吉野 誠

孫五歳これがフジかと林檎食む

膝は孫に兜も大刀も飾りけり

炉明りや骨身に沁みるウクライナ

やばいぞと無為の日ありて梅を啣む

伊予柑のたわわな枝や春来る

向日葵と背比べかな孫五人

焼芋を食う孫二人襟立てて

ワクチンと医師の疲労と夜長かな

湯豆腐や古稀の同輩なにかまと伊豆の宿

## 投句のきっかけ

◇ 近所に住む孫との交流は、私の楽しみの一つです。可愛さ、成長の喜びを満喫しています。発見や新しみもあります。

◇ 「旅」で叙情が豊かになり、メラメラと句作の気持ちが生れます。心に浮かんだ言葉を書き留め後に歳時記を読み推敲します。

◇ 投句のきっかけは、前部長の前橋竹之先生に「楽しいよ」と勧められたことでした。

入札替わり皆横たわる床紅葉

金木犀香の先のゴミ置場掃く

紅葉の知恩院訪ひ木魚撞く

福島や故郷繫ぐ菊日和

祝詞聞く手に千歳飴はや五歳

保津峡をくだる客みな紅葉顔

苔掩ふ紅葉の紅や抹茶飲む

山粧ふトロッコ沸騰嵐山

千円を払いて古寺に紅葉訪ふ

壁一面の釘抜き見事冬日差す

里芋を煮つつ更けゆく去年今年

◇ 以来、新聞の俳壇、プレバト番組などを見ていて関心が高まりました。心と言葉を紡ぐ作句は苦しい時もありますが、「楽しい」時間です。

◇ 花水木九十五号から投句し始めました。百号に出会えたことは感謝です。

伊予柑のたわわな枝や春来たる 誠

評

「鈴なりの伊予柑」と「他の事象との「組み合わせ」の句です。

この句のような「コンビネーション」よき重要です。

「たわわな枝」作者の感嘆が込められています。

早春の「しまなみ街道」からの「伊予柑狩」素敵。

明治二二年にて愛媛県に導入され松山の農家で栽培される。

やがて「伊予蜜柑」という呼び名で京浜市場に出荷されるようになる。

愛媛県産の温州みかんと混同されることから、昭和五年に伊予柑という名に落ち着いた。

その後「枝変わり」から「宮内伊予柑」が発見された。

※ 添え発句 伊予柑に光沢与ふ灘の風

伊予柑にしわくちや爺の手が伸びる

煌めきも想ひも八重の遠花火 誠

「文字選び」がきいた作品。

「遠花火」を見ながらの人生の充実感が伝わる。

雲の峰より高みに富士の嶺 佳一

飛行機から雲海に浮かんだ富士。甲斐の古刹から、三保の松原、秦野のゴルフ場、十国峠からの富士も見ました。堀井氏はどこで富士を見たのでしょうか。雄大で美しく日本一高い富士山は、誰もが訪れた地でその姿に感動します。

夏の青天が広がる暑い日の午後むくむくと湧き上がった白い積乱雲よりも高く聳える富士の頂を見つ「高い」と感動した句です。中七は一音少ないが、「高みに富士の嶺」と高揚を覚えたのでしよう。

誠より

# 茶の花の零れて白し庭の隅

荒井 篤



高二の毎日は灰色濃厚、悩み多く辛かった。国語の教師に突然俳句を作らされた。庭の隅に咲いていた茶の株を思い作ってみた。細かい所をよく見たと褒められた。

同じ頃別の教師に書かされた作文の「秋思」が教室で取り上げられ、一寸自信がついた。書く事の楽しみを教えられ、国語が好きになったのは教師のお陰だった。

# 雨奇晴好

荒井 篤

春水の怒涛となりて湖へ

麦踏めば可哀相だと喚く子等

川端忌山の音聴く化粧坂

お絵描きの子等へ枝垂るる桜かな

九条を揺する人あり朴開く

冷奴買ったばかりの夫婦箸

夏帽や台詞似てゐる小津映画

馬車道を流るる市歌や鷗外忌

電線に引つ掛かたつたる後の月

俳句あれこれ

ゐろりばた

今日ものどかに

かこみけり

◇ 県北津久井では、ゐろり

を火代と呼んでいた。

我が家の火代ひしろは横座を占

める父とぼだ櫓ぼだを焼べる母だけ

の暗い場だった。

友達の家の和やかさが羨

ましく、今日あ・じ・も、かこみけり

と現実と裏腹の虚勢を張っ

た投げ遣りの作だった。

〈小三国語の時間の作〉

ビルマから還らぬ骨の墓洗ふ

荒海の佐渡に嬉しき朱鷺の声

指触れてはらりはらはら貴船菊

小春日や雨奇晴好の癒しの湯

熱爛に暫したためらふ章魚たこの足

臘梅の先のスーパームーンかな

大仏の肩に冬日の留まれり

禍も福も同じ画数老の春

遠き日の彼の人よりの賀状来る

おおあした  
大旦米傘喜寿の揃ひ踏み

津久井湖に令和五年の初日影



担任は女学校出たばかり  
の宮城寿美先生だった。

遠き日のバレタイのほろ苦く

篤

評 「句型」「おおまわし」・「上五」替えられます。

※江戸時代の宗匠は「おおまわし句」で、「中七」を弟子に詠ませました。

遠き日の蔭の臺揚げほろ苦く

遠き日の進路面接ほろ苦く

◎昭和二年生まれの私には「ほろ苦さ」が分かりません。

「ほろ苦さ」を主題にして一句欲しいですね。

粹き知らずバレンタインのほろ苦く

ストレートバレンタインのほろ苦く

手をつなぎ櫻ふぶきの老デート

郁枝

息子（娘）夫婦に総てを任せた健康な仲良し夫婦。櫻は、普賢象、御衣黄、薄墨等いろいろあるが、ここは散り際の美しさで他の追随を許さない染井吉野だろう。

親密さを表わす手をつなぎを初句に持ってきた手際の良さと、櫻ふぶきという美しい日本語で表現した技は、読む者の心をどこまでも膨らませて、心憎いばかりである。

篤より



能舞台跳ねて大山虫の闇

福田 三郎

春夏秋冬移りゆく自然や受け継がれる風土催事いわゆる伝統的文化に心の豊かさを感じ、楽しみたいと願う。それに叶う行事の一つに大山阿夫利神社火祭薪能がある。

火打石で点火した薪の灯が燃え盛り、能狂言の演目が進むにつれて舞台も観客も幽玄境に包まれる。

公演が跳ねると、消えていく篝火と共に人影が薄れ、能舞台を包む大山の大自然・漆黒の闇が、虫の大演奏会を始める。ずっと鳴いていたはずなのだが、にわかには、虫時雨に遭うのであった。

# 八十路を生きる

八十路やそに入る掌見直すや啄木忌  
肉桂につぎの根買って齧った祭りの日  
子猫一声からすに狩られ空に消ゆ  
飼育小屋投げキッスして卒業  
布濾ごしの井戸水跳ねて夏は来ぬ  
自肅疲れたいの知れぬ夏来る  
水琴窟耳を澄ませば蝉時雨  
語り部の従軍看護婦首の汗  
我が頭上追ひつ追はれつ赤とんぼ



月も虫の音も能を演出

## 自句自解

### ◇秋の大山恒例行事

大自然の中、能狂言を生  
舞台でたのしむ。

薪能は春の季語になっ  
てい  
るが、大山では「火祭り薪能」  
として十月に実施

火入れ式舞台に秋の夕とばり

ひつじだ

■田を舞ひ立つ朱鷺や五羽六羽

新蕎麦や芭蕉を辿る北陸路

ゴッホ展列は途切れず冬紅葉

コロナ時代地域師走の自警団

ゆるがせにされて憲法去年今年

富士仰ぐ場所まで杖と初散歩

入選句載る季刊誌や初郵便

獅子舞に泣く子さし出す親もゐて

初場所や幟にをどる江戸の文字

己<sup>や</sup>んぬる哉ワクチン5度目春隣

◇私の俳句のたのしみ方

・句碑建立

手ごろな石に、好きな句を書き好きな場所に置いてみる

・俳句カレンダーにする

・短冊や色紙に書いてみる。

・旅行先で俳句ポストを見かけたら投句する。



大山の能舞台



大樹亡くも史話脈脈と実朝忌 三郎

評 「おおまわし型」鎌倉時代の史話が様々詠み込める。

「亡き大樹」は「公暁の隠れていた千年を誇った大銀杏のこと」

台風で折れたが近年新芽が育っている。大河ドラマのお陰で八幡様大賑わい。

◎ 「脈々」とせず「脈脈」に「個々の史話」が蘇ります。「大樹亡き」ではなく「大樹亡くも」と詠んだことに風格を感じます。

※添え発句

大樹亡くもふた心亡き実朝忌

大樹亡くも箱根路越ゆる実朝忌

大樹亡くもあま小舟実朝忌

大樹亡くも必ず待つと実朝忌

○語り部の従軍看護婦首の汗

「首に汗」では、事象を表しただけの句になって終いますが「首の汗」によって、熱弁が窺われます。

木枯らし一号画鋏ばかりの掲示板 信子

町内会の行事予定やお知らせ、サークル活動の呼びかけから役所の発行情まではり出される地域の掲示板。所狭しと留めてあった印刷物は、昨夜まで吹き荒れた木枯らしに引きちぎられた。なんと、紙片をへばりつかせて画鋏だけが目立つ、初冬の掲示板が立つ。次はどんな情報を提供するのだろうか…。師走の足音近づいたなあ。

「作者のつぶやき」や六本木先生の巻頭句鑑賞文も素敵ですよ。（花水木 95号の巻頭句参照）

三郎より

青山を屏風と聳そはだつ活断層

鷺山 龍太郎

目が慣れてくると、屏風状に隆起した山脈の麓は活断層と分かる。退職して、自由に旅することができるようになり、関西地方の活断層群を目にして驚く。神戸は、淡路から伏見に向けて町中を活断層が貫き、それを境に六甲の山地が聳え立っている。この自然との共生の術を考える防災教育が今のライフワークである。

# 畏怖畏敬

鷺山 龍太郎

## 自句自解

◇ 自宅は東京大田区の海に近い川沿いのため、水鳥や汽水域の生物の動向を身近に感じ、撮影し、句材としています。火山や活断層を巡る旅も楽しみです。自然への畏怖畏敬と共存が一つの句題です。

青山を屏風と聳つ活断層  
活火山緑に包まれ赤ら顔  
夏の富士千変万化の絹繕う  
風洗う電車待つ手に退職令  
ワイシャツを五枚最後と洗う夜  
朝の子等犬と見守る冬姿  
百合鷗木枯らしに乗り江戸の海  
冬鴨や夏如何に生くロシアにて  
鴨立てり氷と夜のシベリア路



神戸の六甲・淡路断層帯

冬池に翡翠飢えし目は虚ろ

夏の陽に軽鴨育ち雛七羽

夏雲や成層圏へ昇り龍

鉄床雲雨の尾引いて虹かかる

夏雲の湧き立つ天を燕射る

鯔の子ら上げ潮に乗り光り行く

日暮しの輪唱涼し旅の宿

熊蟬が盛りと囀す朝の園

螻螂の凜たる姿風の中

モスクワも戦地も此処も緑燃ゆ

麦刈る季両軍の兵里想うや



モスクワの戦地も此処も緑萌ゆ 龍太郎

評 江戸時代の平常の作り方「おおまわし」句

世の中は「戦争・インフラ・徳政」で変わるの  
で「戦争はなくなりません」

コンビニの防犯カメラが雛背負う 龍太郎

評 秀句。「句材」が新鮮。「おてがら」。「組み合わせが  
良い」

「添え発句」

コンビニの防犯カメラ雛を守る

竹藪の穴ウクライナはと汗拭ひ 誠

二月に始まった戦争も夏を迎え、藪や塹壕に身を隠しつつ戦う兵士の過酷な現実を想う句。自らの日常の作業や風景、季節感と、今現在戦地の兵士が見ている風景を繋げようとする心の試みに共感できる。

龍太郎より



## 燃えよ赤ハイビスカスは子のエール

野村 啓子

令和二年五月十日、母の日に、次男が、ハイビスカスをくれた。一輪の花は、夜しぼんでしまった。翌朝、なんと赤の美しい花が咲いている。調べてみると、咲くのは一日だけ、次々と別の花が咲いていくとのこと。赤のハイビスカスの花言葉「常に新しい美、勇敢」花を贈ってくれた優しさ、日々新しく咲く花、燃えるような赤。全てが私へのエールと感じられた。次の年も、その次の夏も、ハイビスカスは咲き続け、私を勇気づけてくれている。

# 家族と句友と

野村 啓子

カルメ焼き父の魔法に見入る子等

母刻む音リズムカル田芹の香

鈴鳴らし母に届けよ柏餅

蝉取りに祖父ほうき持ち参戦す

燃えよ赤ハイビスカスは子のエール

救急の機器見つめいる炎暑かな

病む夫と通う道々百日紅

秋天に白雲流る術後良し

大樹とも頼りきし夫萩の花

思い出すままに

◇厳しかった父が、火鉢の季節には、おたまにザラメを煮立たせて、かけ声をかけながら魔法のお菓子焼いてくれた。自分のがうまくできるかと思つめる三児のわくわく感。

◇料理も裁縫も得意だった母。遠足の日には新しい服。おやつもおかずも手作り、包丁の音、ミシンの音、美味しい匂いがあふれていた。

◇四人の男子を育てた義母。柏餅が大好き。大震災も戦争も生き抜き、乳児保母の経験を生かして孫育て。感謝の気持ちいっぱい。鈴を鳴らす。

通じ有り報告はずむ秋麓

雲の峰ゆったり映る鶴見川

尻上げて撮影ポーズ秋あかね

腹見せて時にばたつく夜の蝉

紫陽花や五日の留守に七変化

門々に違う顔せり薔薇光る

彌太郎評言葉の力柚ゆず香る

茶作りに親しみし師の美の作法

存在を師は句に託し咲く堇

マスク顔目のほほえみが陽のぬくみ

冬埠頭ガンダム立てり天を指す

◇いつも健康で頼りにして  
いた主人が入院、手術。  
祈りとともに過ごした夏  
から秋。

◇デビュー句

・毎年、「国語楽会」で訪  
れる八ヶ岳

・シドニーから帰国した折  
の驚き。

◇師の一人ずつの句への温  
かい評に感動。

・鎌倉の暮らしの中で茶作  
り。初恋の方が茶道の師  
匠。揖保の家で小諸すみ  
れを育てた彌太郎先生。

・彌太郎先生が一人秀句の  
寸評でとりあげてくださ  
り心に残っている二句。

孫二人揚げたてに笑む落の臺 啓子

評 「句型」「おおまわし」「上五・下五名詞型」

「孫俳句」

◎「孫の笑顔が一番」人生の幸せが滲んでいて  
素晴らしい。

孫の表情・動き・「連躰詩」が色々詠めます。

※添え発句 孫二人塩味が好き落の臺

孫二人食べ方同じ落の臺

孫二人エプロンパンダ落の臺

孫二人熱し熱しと落の臺

春深し道志の谷の深き闇 篤

二〇一九年九月、一年生女兒が道志川近くのキャンプ場で、突然、姿を消した。三年後の春、遺骨や遺品が次々に見つかり、美咲さんの物と判断された。事件か事故かは不明。愛らしい笑顔を無情にも飲み込んだ道志の谷の闇は深い。

筆者は、鳶の輪描き、猪の飢えなど印象に残る句が多い。春深しの季語と深き闇が呼応して胸に迫る句である。

啓子より

夜は長し父の学びし平家読む

小坂 映夫

三十半ばで戦死した父が学生の時、テキストとして使っていた、「平家物語」が手元にある。昭和二年発行五五〇頁のものである。読み始めたが、どうせなら書いてみようかと大学ノートに書き写しはじめた。活字のかすれなどがあるので途中から岩波文庫をテキストにした。この十二月、五年以上かかって全文書き終えた。

# 日常の中で

小坂 映夫

だんかずら桜の下に園児たち  
ウォーキング鎌倉わかめこの年も  
夕顔の白さを思い種子をまく  
下校時の見守り終えて新茶かな  
もどり梅雨重たき雨戸力こめ  
雨やんでせみの初鳴き一斉に  
夕顔のかおりを部屋に風はこぶ  
柿若葉ねこの額の庭照らす  
羽ひろげ蜜吸う小鳥のうぜん花

## 句の背景

◇上の二十句のうち半数以上がわが家で「見」「聞き」「感じたこと」を詠んだものである。

もっと「旅」や「社会生活の中」で感じたことなども読んでみたい。

◇コロナ禍や、自分が体調をくずしたこともあり、わが家で詠んだ句が多い。

◇「鎌倉」を俳句で表したい

◇「俳句」に入った頃と同時に「写真」にも入部した。どちらも初心者である。

夕顔ののびたるつるを直しけり  
こんなにもつゆあけの空青々と  
まどろみて耳に入るはせみしぐれ  
のうぜん花風か小鳥か一つ落ち  
義兄<sup>あに</sup>逝きて施餓鬼供養の覚園寺  
夜は長し父の学びし平家読む  
柿紅葉その色あいにかメラ向け  
ひとひらのまっかなもみじ石の上  
波を切るヨット一艇冬の海  
隣<sup>よそ</sup>の猫わが家の縁で日なたぼこ  
このいくさいつままで続く今厳寒

次頁で取り上げた句の作者  
正子さんとは、今年の「フォ  
トさくら」展でたまたまとな  
り同士の展示であった。  
俳句も写真も正子さんは大  
先輩です。



寒に入り計報いづか今日もまた 映夫

「計報の句」は悲しいものです。やるせない気持ちになります。「計報」の来る度に「覚悟」が深まります。しっかりしましょう。

添え発句

○寒に入り音信絶へし友思ふ

○寒に入り心あやふき我が覚悟

○寒に入り教へ子計報駆け来たる

(亡くなった私の弟は、小学校時代六本木先生が担任でした。)

夜は長し父の学びし平家読む 映夫

父上が教えられた平家物語はどの段でしようか。

愛情と郷愁の込められたしみじみとした一句です。

私は「吉川英治」の「平家物語」から入りました。

添え発句

○夜は長し暗誦惚けて平家読む

○夜は長し敦盛悲し平家読む

首里城よ中高生募金五月旅 正子

令和元年十月に火災で焼けた首里城、それに対する作者の気持ちは『よ』でよくわかる。その近くで多分修学旅行中の中高生が募金をしている。

大規模な復興計画はあるけれど、少しでもその足しになればと行動している。そこに気持ちを寄せた句。

作者の句には、柳川・千曲川・白鷺城・大宰府等旅先の句が多い。私も旅をしたい。

映夫より



がり切りし 学級だより 土用千 中澤 信子

手づくり学級通信の束に今年も風を入れる。

ワープロも無い時代の手づくり。原版はロウ原紙に鉄筆で一画ずつ刻む。印刷は謄写版、ローラでインクを伸ばし、藁半紙を一枚ずつ捲つての手刷り。「坂道」「ちっこい太陽」「〇組通信」とその時々々の想いで名付けた学級通信。子どもの日記や学級生活からいい所見つけて発信。学級全員分を目標に。半世紀近く経ち変色劣化しているが、まだしっかり読める。目を通すとその時々々の個々の姿が浮かぶ。教師であった私のたしかかな証し。柩に入れて欲しいものの一つである。

# 春夏秋冬

中澤 信子

よく匂ふ宿直室の桜餅

四月来る新校長は自転車派

宅配の腐葉土二袋春の朝

風光る胸ポケットのここに夫

横浜大空襲忌

読み聞かす五月あの日

合歓咲いて釣り師にもどる副校長

一分間の中断八月の朝礼

帰省子のいつからこんな大笑ひ

酷暑なりビフステーキでも焼くか

## 俳句あれこれ

◇ 近くに市立図書館がある。新聞の俳句欄や俳誌を楽しみによく出かける。

ただ、最近、読み解けない句が多く、惚けてきたかと少し不安に。選者の評や解説を読むと、かなりの飛躍で、発想想像の感覚俳句。

◇ 自分の句を読み直してみる。みな自分のやった事のでき事俳句（それもそのはず、日記のつもりでの句作であるから）

最近の俳句との乖離。感性が古びたか、でも何かついていけない違和感が残る。

一匹となりし緋目高あまやかす

図書館に定席のあり晩夏光

天の川独りぐらしといふ佳境

自転車にお礼の油冬隣

死神に尻を向けたり花野中

煮凝りが溶ける原発復活論

ほんたふは自由が苦手雪女

煤籠る「靈異記」の中ざわざわす

噓して長押の夫に笑はるる

見舞もう通はぬ道や風花す

針山に娘の遺髪針供養

◇「平明非凡」某俳誌でふと目に止まったA氏の句作の信条。続けての説明に

平明とは、はっきりしていて分かり易いこと、非凡とは平凡でないこと。平明な句は、とかく平凡な句になりがち、そこできかにして平凡でない句にするかを苦心している」と。

◇私の想いを代弁し、肯定された感ありで、少し安心。ただ、自分にとって「非凡」は、高度の課題。努力目標として、今まで通り、日記風のでき事俳句で楽しみたいと思っている。

春の兩腹式呼吸うまくなる 信子

評 「二句一章句」とも「おおまわし句」ともとれる。

「眼中のもの皆俳句」の模範例。

☆ 腹式呼吸は、おへそのした10cmあたりにある「丹田」と呼ばれる場所に力を入れ、お腹の中の圧力（腹圧）を増減させるイメージで呼吸します。これにより、肺の底部にある横隔膜が大きく上下に動き、呼吸量を大幅に増加させることができます。

腹式呼吸では副交感神経が優位に働くため、リラックス効果が期待できると考えられています。

冬の蝶涙一筋逝きし妹 和子

冬の蝶とは、妹さんのことでしょうか。別れはつらい、まして、肉身との死別ともなれば尚のこと。中七の「一筋の涙」が切ない。

最後の別れの刻。じっと妹さんのお顔を見守る。ツーンと目尻から涙が零れ・・・、そして静かに旅立ってしまった。

きっと、それなりに覚悟はしていたでしょうが、やはり、現実となると受け入れ難い。送る側となってしまう実姉の深い悲しみが伝わる。合掌。

信子より

# 椎の実も青きままなり無言館

桑原 正子

私の一句に、令和四年だからこそこの句を選んだ。言うまでもなく、ウクライナに国際連合常任理事国ロシアによる軍事侵攻が続いているからだ。無言館には、絵画を残して戦地に散った若き画学生の魂が眠っている。椎の実も、青きままにて地に転がっている。

二度と決して繰り返してはならないのだ。『おせん泣かすな』を万国の大人たちの合い言葉に、子どもたちに訪れる未来を届けたい。

# 「戦」の字は

桑原 正子

## 自句自解

### ◇今年の一句・

友の一句・私の一句

もはや、世界中の人々、子どもたちが来年も「戦」におびえて暮すのだろうか。

幼少時に涙にくれた「ベルマの竖琴」、水島上等兵の願いが届いてほしい。二十一世紀に「戦」は無いと信じていた。野村啓子さんの一句にも私の一句にも「戦」の歴史が潜んでいる。

### ◇ニュース&ドキュメントから

エリザベス二世ご逝去後のヒューマンドキュメント中の演説に感銘。白人政権擁護のサッチャー首相に対し、アバルトヘイトに抗するマンデラ氏（後日、大統領）を支援したとのこと。「自由こそかけがいのない人間の宝・希望である」と。

### ◇ジェンダー平等に

今年はこの論が盛んになった。あまりにも低いギャップに、中学生もあされた。

北条政子や藤原彰子の評伝等を女性研究者が著述し好評、二人の解釈も一新へ。

「戦」の字は競技のみにて歳の暮れ  
ミヤンマーよ「たて琴」は今夏立ちぬ  
不戦こそサンタが子等へプレゼント  
ウクライナ負けるな我ら節分会  
「自由こそ不変」と女王秋旅立ち  
チューリップ孫の歌声うららなり  
孫誇らしやLINEで届く入学式  
富士あおぎペットボトルに清水入れ  
二年めも母娘の笑顔朝顔と

あと二年免許更新百日紅

露草とヒマラヤのけし我の色

紅葉透け蒼天望む百草園

ジエンダー論彰子に評価望月夜

沖繩の事前学習冬休み

ニユースありアイスチューリップ花菜の園

チャレンジは日本橋から初日の出

街角のピアノ弾きたし寒稽古

鎌倉や政子の想い冬ぼたん

車いす新緑子等汗源氏山

切通し崖より滴る夏木立

◇想いの鎌倉

二校目の校長時代、鎌倉一日旅行が好評。子どもたちと調査を重ねて出かけた。車いすの友達も共に参加と、教職員が力を合わせて源氏山、鶴岡八幡宮、朝比奈切通等に行った、源平池に集ったり、境内を巡回したりする白鳩たちを見て、六年生は口々に「戦い続きの鎌倉武士も平和な世を望んでいたのか」と感慨深気であった。

◇八十にしてチャレンジ

昨年は、孫娘の入学式には人数制限。LINEで誇らしげな孫と両親の動画が届いた。校門の前での写真には吹き出し付き。

私もチャレンジと日本橋からウォーキング開始と一念発起した。今年に慣らしウォーキングで茅ヶ崎・平塚・大磯・小田原と快調。来年は沼津までと計画。

併せて来年のひそかなチャレンジ。レッスンも再開し、街角ピアノデビューをもくろんでいる。

「七騎落」 晴れて鎌倉春の浜 正子

評 史実を知らないと読み解けない句です。

※ 頼朝は石橋山の合戦に敗れ、主従八騎となつて船で千葉の安房に逃亡を計る。源家では八騎を不吉な数とするので、土肥実平の子遠平を陸に残し七騎で落ちる。

七騎堂に祀られているのは、安達盛長、岡崎義実、新開忠氏、源頼朝、土屋宗遠、土肥実平、田代信綱。

◎ 旧鎌倉には「三つの浜」があり、それぞれに特徴がある。

「春の浜」に相応しいのは「由比が浜」「材木座海岸」昔の船着き場「和賀江島」がある。荒波寄せる「七里が浜」遊泳禁止。

※添え発句 七騎落鴟窟より秋浜に

七騎落行方占ふ秋の浜

七騎落安房へ安房へと秋の潮

七騎落晴れて衣張り花見かな

舞踏会名残りや初夏の氷川丸 啓子

氷川丸はシアトル航路で活躍後、戦時に特設病院船として活動した。関東大震災時の瓦礫を埋めた山下公園に係留されている。

往時、汗ばむほどにワルツに興じた二人が、船端で初夏の風を受けて見つめ合う姿が浮かぶではないか。手をとり合い未来を語り合う声が聞こえてくるようだ。

作者は、何人も何物も二度と戦時にかり出されたり使用されたりすることのない時代を深く熱望しているに違いない。

正子より



一握りの菖蒲米寿の湯船かな

宮澤 一雄

この句は、誕生日直後でもありまた、叙勲の知らせが重なったこともあって、吾れながら自分の健康に思いを馳せたり、まつわる菖蒲に感謝したりしました。

この年の「俳句年鑑」の俳誌紹介『春潮』の例句の一句に加えられました。

# 初茜

宮澤 一雄

初茜梢に見入る鳥の居し

大寒の朝の家並み遠鴉

朝空へ広がる梢春を待つ

垣内の庭の一樹の寒椿

並木路の木の間に白き沈丁花

芽柳の風のまにまにもつれなし

残鶯の一声ありし朝の窓

大楓茂影にと一休み

梅雨晴間いろは楓の空仰ぐ

## 俳句の背景

◇ 初茜の鳥は雉鳩でありました。後に十一月八日皆既月のあった翌日の朝我が家の水場の日向に伏せて居ました。

安らかに整えて亡くなっていました。縁を感じて裏の木の下に埋葬しました。

◇ 「鳥鳴いて」と「小春日」は南太田小百周年記念日に向かった校庭の景色でした。校章が柏の葉デザインでした。

風まかせ柳に触る、蓮一花

雨烟る丘の校舎の秋灯

秋雨に生きる青さの桑古木

雨筋に実る色見ゆ石榴かな

黄蝶群れ離れぬ庭の秋日和

懸崖の水辺連なる葛の花

傘差す間楓紅葉の雨宿り

鳥鳴いて日照る柏の小六月

小春日の校舎にすつく柏の木

池さらい終へし広さに鴨の群れ

病む妻の丘を遠見の昨年今年

◇故長田正江さん（義妹）  
を悼む

涙ながらに式場で読みました。

コスモスの花の如くに母親似  
吟ずるは鶉鳴く如し母姉妹  
朝に姉夕に妹逝く鶉高音  
姉の訃を仕舞ひ妹逝く秋深し  
良き輪廻あれと祈りて秋惜む

令和四年十一月一日

宮澤一雄

校庭に冬紅葉濃き影伸ばし 一雄

評 典型的な「にまわし句」刻々と変わる校庭の

様子が的確に詠まれている。

「子ども達がいらない校庭」。「落日の進む静かな校庭」の描写。情感惨む秀句。

※添え発句 校庭に枯れ木櫛の影伸ばし

校庭に西日校舎の影伸ばし

校庭にへチマの棚の影伸ばし

校庭に枯れ藤棚の影伸ばし

夏雲の沸き立つ天を燕射る 龍太郎

モスクワも戦地もくも緑燃ゆ 龍太郎

天と地を制する如き御姓名の方のお声も男らしい方ですが、お顔の方はまだ不明。しかし名は体を現わすか句も力強く鋭い。

一句目天を射るは見事ですね。私はむかし諏訪湖の釜口水門『天龍川の流出口』に立って積乱雲が横に靡いて八ヶ岳連峰を覆う姿に天龍川の始まりを感じたことがあります。

二句目の戦地はウクライナのことでしょう。横浜の戦災にあった身には耐えられない事ですが。緑燃ゆを願うは平和を願う事ですね。

一雄より

枯葉降る街は灰色交差点

齋藤 隆士

いつものことですが句会の日の投稿日が近づかないと俳句専用の受信機が働かないのです。幸いにもこの日は受信機がオンになったように駅を出て曇り空の街に出た時普段は気にも留めないと思うのですが街路樹の葉が十二月の風に飛ばされるのを目にしました。

# めぐる時節よ

齋藤 隆士

初詣登る石段見上げけり

咲き誇る千両万両小さき庭

終うのを忘れられしや注連飾り

冬ざれや隣のすだれ風に揺れ

主なき庭の老木梅一輪

枯畑野老ひし夫婦の背の温し

ランドセル揺らして駆ける新一年

花は葉に手を挙げ渡る一年生

子らの声絶えて校庭花は葉に

## 俳句の背景

退職校長会でお世話になつた同時期に、花水木の方々と句で親しめたひととき。当時の会報の俳壇は、なつかしく思い出されます。

花は葉にこの病院も幾度か

初蛙洗髪の湯を止めにけり

半袖はまだ早からん青葉冷え

母と子が指差し示す虹の橋

昼下がりに日傘の幼女影重し

マスクごし子らは挨拶夏登校

コロナ禍中猛暑に五輪豪雨かな

手花火や暑き夜を惜しみたり

秋寒し喪中の挨拶今日もあり

師の逝きて晩秋の街雨怵え

月冴ゆる人無きブランコ揺れにけり

◇会長在任時代の会報

会報 60号より

俳壇

花来木 (前期分)

六本木彌太郎・選

滝は流れて巡る三鷹や桜桃忌 福田 三郎  
 秋居の部屋を賑はす芍薬花 相澤 淳子  
 散り散りに右手の先の花筏 齋藤 隆士  
 十薬の匂ひ残れり袴りの子 山本 要子  
 楠若葉石のアーチの軌跡所 大石 金雄  
 プラタナ又翻しゆき青あらし 川口 美明  
 下校児の大声 標よ青嵐 濱野 郁子  
 遠雷や空を切り裂く通り雨 前橋 竹之  
 大てまり小てまり風の通学路 高橋 和子  
 老鶯の歌ふを真似してひたり笑む 山本 尚之  
 紅白にモザイクされた躑躅咲く

俳壇

花来木 (後期分)

六本木彌太郎・選

ベッドより夫の御慶のなめらかに 中澤 信子  
 初夢を添らと語る夕間暮れ 栃木 やよひ  
 ひと樹の気温上がりぬ冬景色 興石 スミ  
 人を恋ふ介種の窓に春の月 前橋 竹之  
 主持つ部屋いっばいに水仙香 相澤 淳子  
 初景色箱根路越えて走りきり 高橋 定雄  
 笠子鳴く観音崎の慰霊の碑 乙須川 昭  
 初春や千支の七瀬と出会ふ年 濱野 郁子  
 雲間から初日あふれて散らばうぬ 堀井 佳一  
 カルメ焼き父の療法に見入る子等 野村 啓子  
 かむながら瑞穂の園の初朝り 大石 金雄  
 大いちよう満えて十年や実朝忌 福田 三郎

会報 63号より

初詣登る石段見上げたり

隆士

評 自分の「感慨」を秘めた客観写生の秀句。

「おおまわし句」とみると「見上げたもの」を次々と詠むことが出来ます。

「初詣」で切ると初詣の事象。感慨が句になります。

※添え発句

初詣連なる鳥居見上げたり

初詣背中背中を見上げたり

初詣八幡扁額見上げたり

初詣はためく幡を見上げたり

初詣大臣山見上げたり

初詣でマスク外して見上げたり

初詣はや梅ふふむ光則寺

初詣また仕切り・綱神速し

初詣みな新しき衣着て

初詣顔見知りなる巫女もいて

初詣英勝寺より長谷寺に

初詣一度もせず引越せり

古き友佳き友息災賀状来る

淳子<sup>あつこ</sup>

今年もポストに賀状が届く。

知人、友人、教え子いろいろな御縁の方からの賀状が。たった一枚のはがきだが、今年もまたお互いの「息災」を確認し合う。年に一度の旧交更新だ。

賀状は、昨年中、身内に喪の不幸も無く、恙なく過ぎ、新年を迎えられた証し。

お互い、よい年が送れそう。

隆士より



# 旧会員雑詠

(記念句集Ⅰ・Ⅱより)

行く秋	五十嵐 貢	91	喜寿の母	繁里 剛	92
櫻花	首藤 安子	91	節分の鬼	山口 昭和	92
首たれ	長谷川はつ子	91	古網戸	渡辺 英城	92
びしびしと	石川 琢之	91	年玉を	乙須 利昭	93
しわぶき	篠木 昭弘	91	花の道	高橋 和子	93
夢の中	白石 孝徳	91	繭干すや	山本 要子	93
漬物	峰岸 三郎	92	山女魚	輿石 スミ	93
開会の辞	鈴木 ヤエ子	92	秋なれば	栃木 やよひ	93
富士の山	桑原 昇	92	梅雨の朝	高橋 安司	93



行く秋

五十嵐 貢

初夢やせめても宇宙空の旅  
病む妻に存分出来ず春悲し  
胸元の十字の光る聖五月  
行く秋や妻の遺作の寂として

櫻花

首藤 安子

闘病の先の見えない寒の空  
点滴の一滴ごとに冬日射す  
贈り主まろき味なり茂木の枇杷  
朗々と吉野懐古の櫻花

首たれ

長谷川 はつ子

首たれ明日を咲く夢虞美人草  
連峰の果てまで続く五月晴れ  
杖を得てたしかな歩み秋麗  
うたごころいずくにもなき年の暮

びしびしと

石川 琢之

びしびしと霜強き夜の床をとる  
子守歌廃れし国の土筆かな  
花冷や舳先の揃ふ船溜り  
種蒔くや規則正しき足の跡

しわぶき

篠木 昭弘

入院の鞆に休む秋の蠅  
安らぎをまた取戻す咳のあと  
すんなりと咳が出る夜の朧月  
瘧昼寝点滴昼寝冬ぬくし

夢の中

白石 孝徳

でで虫の殻透きとおる梅雨晴れ間  
盃蘭盆会父の齢を越えにけり  
箏曲や一期一会の梅野立  
寒月や列車の軋み夢の中

漬物

峰岸 三郎

漬物が出来たと母の初日より  
沈丁の香り霏れて春を告げ  
咲き揃ふ向日葵一つそっぽ向く  
雷雲や筋もりもりと仁王像

開会の辞

鈴木 ヤエ子

開会の辞に添ふる花一句  
花吹雪喪中の庭へ容赦なく  
外出を促す今朝の花アザミ  
朝涼や垣刈る夫の背ナ若し

富士の山

桑原 昇

彼方には春重層の富士の山  
残像に想い重ねる花火哉  
猫の子の家なき今日の寒さ哉  
幾重にも積もる落葉の温かさ

喜寿の母

繁里 剛

喜寿の母送る棚田に初明り  
さらさらと紅葉散りゆく茅の屋根  
米寿越え紅葉の山路行く人よ  
活気満つ手つなぎすすむ秋夜店

節分の鬼

山口 昭和

節分の鬼くらしめず福を呼ぶ  
寒村の案山子行列村おこし  
葛桜老母口辺にしわ刻む  
新茶喫む今日も生命のあらたまる

古網戸

渡辺 英城

メダカの子俺はメダカと威張り顔  
古網戸ぴんと張り終へ四時のお茶  
壁替えて広くなりけり夏座敷  
ゆかた着のシツカールはやさしかり

年玉を

乙須 利昭

年玉を妻に貰ひてあな可笑し  
艶書読む八十路の笑ひ春の猫  
夏雲の燃えて火を吐く桜島  
唐黍の沃野に迷ふ一日かな

花の道

高橋 和子

花の道心ゆくまで迷ひたき  
春門出すべなき母は祈るのみ  
駆け込みて冷房バスに救はるる  
大樹さへ葉を垂らしたる炎暑かな

繭干すや

山本 要子

繭干すやいたづらに溜め込みしもの  
春浅しマリレバの撥軽やかに  
証書受く背の緊張や幣辛夷  
ひと粒にひとつの歴史年の豆

山女魚

輿石 スミ

せせらぎや山女魚の刺身しこしこど  
そぞろにも旅せむ思ひ夜の秋  
打ち氷を日課としたる好好爺  
時雨るや閉店セール松坂屋

秋なれば

栃木 やよひ

秋なれば食べずに愛でる七草か  
教室に声弾け飛ぶ花の日々  
北の街よさこいソーラレ夏を呼ぶ  
年明けも帰れぬ我が家恋しかり

梅雨の朝

高橋 安司

梅雨の朝地衣一周り濃くなりぬ  
行くほどに柳並木や夏の雨  
日干して黄土の里のトマトかな  
幾つかの渦舷側に夏の雨

## 句座の始まりは東小学校コミュニティー（平成12年6月～）



田 植 六本木彌太郎  
 上手よと言はれ掛る田植かな  
 棚二つ上は代田や苗待てり  
 里の子の男ぶりなる田植かな  
 早苗糞に酔ひて棚田をひと巡り



平成29年6月（花水木77号より）

- ・投句用の短冊用意
- ・四句を短冊に書き投句
- ・四枚の清記用紙に書き写す
- ・順次回して、各自選句する
- ・自選の句を披講する
- ・講評・指導は六本木先生



なつかしいメンバーの方々

思い出すあの句  
 あの人  
 あこの句会

## 桜木町ぴおシティーに会場を移して（平成30年6月～）



六本木先生をお迎えして、コロナ禍で開かれた久しぶりの句座（令和4年6月）。

令和2年度、3年度は句会は通信句会とした。



# 巻頭句欄を作って

花水木81号から、六本木先生にも後押ししていただき、巻頭句を取り上げて紹介することにした。会員への励ましともなればとの思いからである。81号から99号までの巻頭句を紹介する。

81号	梅雨の気の動き大山聳え来る	六本木彌太郎	(平成30年6月)
82号	不知火の苦海の時や春を逝く	大石 金雄	(平成30年9月)
83号	語り部の老いたる十二月八日	前橋 竹之	(平成30年12月)
84号	美しき日本の文語早春賦	荒井 篤	(平成31年3月)
85号	的中の音呀え返る甲矢乙矢	六本木彌太郎	(令和元年6月)
86号	草刈りや振るふ大鎌爺仕込み	大石 金雄	(令和元年9月)
89号	一握の菖蒲米寿の祝い風呂	宮澤 一雄	(令和2年6月)
90号	したたかに生きよ語れよ敗戦忌	前橋 竹之	(令和2年9月)
91号	切干や四十で逝った母の味	濱野 郁子	(令和2年12月)
92号	公魚の揚げたての味恋の味	高橋 定雄	(令和3年3月)
93号	メーデーの記憶の中の伊勢佐木町	堀井 佳一	(令和3年6月)
94号	置き行燈ポツリ吐露する長き夜	月田 和子	(令和3年9月)
95号	木枯一号画鋏ばかりの揭示板	中澤 信子	(令和3年12月)
96号	松過ぎて米寿の道を語り合う	山本 尚之	(令和4年3月)
97号	トラクターの快音聞きたし麦の秋	大石 金雄	(令和4年8月)
98号	観に行かばや三溪園の古代蓮	福田 三郎	(令和4年8月)
99号	生き切りし師の温顔や秋惜む	前橋 竹之	(令和4年11月)



◇ 百号記念句集誌を編むにあたり、先行する退職小学校

校長会四十周年、五十周年記念句集が参考になった。

会員の個人ページに二十句並んでいると、なんの説明がなくとも、会員の生活や思いが感じられてくる。句集にまとめる大きな価値はそこにあると考えた。さらに、百号まで続いた俳壇花水木の特徴を加える方法はないかと、個人ページの組み立てを工夫してみた。

◇ まず、はじめのページに、自選一句を掲載し、句の背景や思いなどを書いてもらうことにした。

◇ 中の見開き二ページには、会員の二十句が並ぶ。新作旧作自由。半年前からの予告で、それぞれの良さが表現できたのではないか。なお、下段にコラム欄を設け、句の背景、感想、資料など自由に記述してもらった。

◇ そして、最終ページは、「俳句往来」の場とした。本俳句部会の特色は、主宰なし、一人一家の立場で、句を通して良さの交流を図ること。それを、六本木先生が推進して来られた。

◇ コロナ禍でも、六本木顧問が、それぞれの句の良さについて寸評を送ってくださったので、会員は勇気づけられた。全員への寸評をまとめてくださった冊子は、句の良さの発見の手法となった。それで、上段には、「六本木先生の選句・鑑賞」を載せ、下段には、各人句友の作品を選び、俳句往来を発信。会員が最も頭を

悩ませたページであろうが、良さも発揮できたのではないだろうか。

◇ 資料は足跡。俳句部が退職小学校校長会の一つの部として認められたのは平成八年。その年の内に、俳句往来一号が、六本木先生のご尽力で刊行された。創部初期入会の濱野会員によって第一号が手に入り、創部当時の姿が明らかになったことはあゆみの項に掲載。また、退職校長会の会報に、俳壇花水木のスペースが設けられたのも大きい。会報をひもとくと、先輩会員が活躍した時期を知ることできる。会報の事業部報告で、部長が年間の計画や、特集について記述してあるので、俳句部の歴史をたどることできるのである。

◇ 百号の完成を待たずに、恩師、顧問六本木先生がご逝去されたのは大きな痛手であった。が、その後を、前会長の前橋先生が引き受けてくださり、未完の鑑賞のページも書いていただけた。彼岸から見守ってくださる先生への報告の気持ちもこめ、編集校正に注力した。この百号記念誌が、これから俳壇花水木を育てるエネルギーになってほしい。

#### 編集委員

福田 三郎	濱野 郁子
中澤 信子	相澤 淳子
野村 啓子	高橋 定雄
鷺山龍太郎	

発行 横浜市退職小学校長会俳句部  
代表 福田三郎

発行日 令和五年三月吉日

印刷 (有) ワコー

横浜市旭区鶴ヶ峰二一〇一八

藤巻ビル一〇二

電話 〇四五―三七〇―三三九四